
「地下茎」12号を発刊して

ひめじ理科サークル 楠田純一

全国の若きサークルの仲間へ
「ひめじ理科サークル」という小さなサークルができて、1年あまりの時間がたちました。同時に出発した、サークル誌「地下茎」も、準備号より、今回(9月号)の発刊で12号になります。ここまでかろうじて出し続けてきているという状況です。

今回「科教協ニュース」編集部より「サークル誌のもつ意味、もたせなくてはいけない内容とは何か、資金のこと— こういうことから、サークル活動の、そして活動を継続させるポイントを指摘して、苦しんでいる全国の仲間を激励してほしいのです」という依頼を受けました。

しかし、先にも書きましたように、私たちのサークルは、できて一年あまり、かろうじてここまで来ているという、まったく若い、そして小さなサークルです。今のところ、そのようなことを言えるような実践も力量ももちあわせていません。だから、言えることがあるとすれば、一年間あまりの私たちのやってきたこと、その中で苦しんできたこと、今も困っていること、そしてうれしかったことなどです。そのことを書くことによって、全国の散在するであろう私たちと同じような、若い、そして小さなサークルの仲間と、「サークルのこと」、「授業」等をともに考え合う契機になればと思ひ筆をとりました。

『地下茎』は、私たちの活動そのものである。

私たちの場合、サークル発足とサークル誌の創刊とは同時でした。

準備会(発足の会1981年7月29日)は、準

備号によってよびかけられました。このときの参加者は5名でした。

そのとき、サークル誌に、私たちの意志を込めて「地下茎」と名づけました。

準備号には、「地下茎のごとく一時的に枯れたり、刈りとられようと、何m、何kmと伸びていき、その仲間をふやし、たくわえた栄養(教材)で、すばらしい花(授業)を咲かせよう」と、その意志をのべています。

これは、私たちのサークル活動への意志表示でもありました。わずかなこの一年間の活動のなかでも、例会参加者2名という状態がつづいたときもありました(今は、3~4名がつづいています)。

原稿があつまず、サークル誌がずっとおくれるということもありました。そんなとき、この原点にかえり、サークル活動の継続をはかろうとしてきました。これは、これからもくりかえされるでしょう。

サークル誌の発行には、いろんな意味があると思っています。サークルの仲間をひろげていく意味においても、また会員への連絡(例会、学習会の案内)の意味も、もちろんですが、それ以上に、私たちの教育実践のすべてを、そして日常を、ここに写しとり、私たち自身のあしあを記していきたいと思ひます。

それは、言わば我々の存在証明のようなものかも知れません。

サークル誌「地下茎」は、私たちのサークル活動そのものなのです。

サークル誌の内容は —

サークル誌の内容は、これまで各号によっ

てちがいますが、これまでに載せてきた項目は次のようなものです。

＝ 例会，学習会案内 ＝

＝ 例会，学習会報告 ＝

これは、このとき用事などで、どうしても参加できなかった人たちへの報告です。

同時に私たちの活動の記録であり、その段階での、私たちの思考、教材解釈のレベルを示すものとなっています。

まとめてみると、案外その場で出なかったものが出て来て、おもしろいものです。

＝ 闇市開業 ＝

これは授業で使えるというような実験、教具等の紹介です。他のサークル、研究会で仕入れたもの、自分たちが授業で使い、これはというものを出し合うのです。

読んだ人が「それでは自分も」と考えたとき、できるだけやってみやすいように、モノの手に入れ方、価格、やってみるときの具体的な注意等をかきたいと思っています。

＝ 本の紹介 ＝

会員が読んでおもしろかった本の紹介。書評も同時に。

＝ 実践報告 ＝

これは、それほど形、文の長短にこだわることなく、ひとつの単元、授業をこうすすめた、あるいは、そのときの子どもの反応は、等をのせたいものです。ある面では、私たちの営みすべが、＜実践＞ということができましよう。そんな幅の広い報告にしたいものです。

＝ いただいた手紙，ハガキ等の紹介 ＝

これまで、この手紙、ハガキには、示唆的なものがあり、私たちは、多くのことをここから学んでいます。地理的に離れている会員や全国の先行する仲間たちからの、最近の様

子や、はげましのコトバなどは、ほんとうにうれしいものです。私たちを支えてくれる原動力にもなるのです。

ボクなど、これを出し始めて以来、家に帰ると、「ただいま」のかわりに「今日はなんか来てたか」「電話は…」というのが口ぐせになってしまっているのです。

それ以外にも「事務局だより」「研究会参加報告」等、その都度自由な形で編集しています。一番困るのは原稿のあつまらぬときです。でもそんなときは、それもまた、そのときのサークルの状況を表わしているのであり、サークル誌のサークル誌たるどころであると居直ってみたりしながらやっています。

サークル誌の交換をしませんか

私たちは今、全国からいくつかのサークル誌を送ってもらっています。同時に「地下墓」を送っています。他のサークル誌を見せてもらうということは、学ぶことが多いからです。

まずひとつは情報交換です。そこに、たのしい実験をみつけたり、すばらしい実践がのっていたりすると、さっそく盗んで自分たちもやってみるのです。

ふたつめに、情報の入手以上に意味あることと思うのです。そういうのを見ると「やっているな」「がんばっているな」、「ようし、こっちもがんばらな」という気にさせることです。ややもすると、怠惰になってしまう気持ちを刺激させられるのです。

全国のサークルのみなさん、そして、これからサークルをつくらうという人、サークル誌の交換をしませんか。

連絡は下記へ。

楠田 純一

▲ この文は、文中にそありきうじうに「科教協ニュースからの依頼で、この一年あきりの自分たちの歩みを記す意味で書いたものです。考えてみると、自分でそハエーと感心するしうね。このあき(ほ)い性格の人間がとそかく。二こきで(こんない)ちをきると、何十年とやっておられる先輩に笑われまうじうが...)きたんじうからボクが、学生のころ(つより十数年)よく「ミニコミ」というコトバを耳にしうした。ボクのきわりにも、ミニコミ誌を出している連中が(い)ば(い)きうした。映画、文学、政治、音楽、生活、何を中校にきえてやるかは別にして...。ボクはいつか、その辺につ有がる「仕事」がききたら...。なんぞ考えています。(換曲)